

濃紺の上着に黒のズボンをはき、頭髪は短めだ。年齢は浩史ぐらいで三十前だろうか。加代は、あらっ、と首を捻った。どこかで会ったことがある…。年末頃、改装前の建物の前でちらっと見かけた、確か、あの青年だ。あのときは、浩史が帰ってきたのかと錯覚して驚いたものだ。背格好といい、髪型といい何となく似ているようだ。と改めて納得した。

青年はさっさと店に入ってしまったので顔まではっきりとは見えなかった。加代も窓を閉め掃除にとり掛かった。

パソコン店は日が経つにつれ店先の貼り紙は増えたようだ。通行人にも店の業務内容を分かってもらえるようにと、店主が心を砕いているらしい気配が伝わってくる。

中古パソコンの販売に修理。買取りや廃棄もしてくれらしい。各種の設定も頼めば出張サービスもする。とにかくパソコンのことなら何でもこなす態勢らしい。

営業時間に定休日のお知らせもきめ細かな配慮がなされているようだ。

しかし、十日経っても二十日経っても加代が見ている限りでは店内に客の姿はなかった。加代はこの業界をよくは知らないが、最近パソコン関連の店は多いように思われる。店を開いたからにはしっかりと宣伝して一刻を争って客を寄せなければ採算が取れないのではないか。競争で勝ち残るのは大変なことだろう。当の店主はさぞかし焦っているに違いない。加代は他人ごとなのになぜか気を揉んでいる。同じ年恰好なので無意識に店主が浩史に重なるのかもしれない。

ひやかしの客でもいい、とにかく店の賑わいが早く見たいと思う。そのうち加代は我がことのようにあれこれ思い巡らしている自分に気付き苦笑したくなる。それ

にしても浩史は最近どうしているのだろう…。

お彼岸に入ると、例年より気温が低い日もあったが、陽射しはすっかり春のものになってきた。夜も昼間の暖かさが何となく寝室に残っている。早寝の加代が布団に入っとうとうとしていると電話が鳴り出した。起きあがり急いで玄関ちかくに置いてある電話へかけよる。

「ああ、俺や…」

少し低音だがとおりのいい浩史の声が耳に飛び込んできた。

「どうしたの…」

加代は思わずどきりとする。よほどの用件がない限り電話をしてくる息子ではない。だから、事件や事故でもあったのではないかと加代は身構えてしまった。

加代の不安などどこ吹く風といった感じで、いつになく浩史はゆったりしている。

2

「大した用でもないけど、元気になって、思っ…」

加代ははぐらかされた気分になる。

「何よ！ それ…、そっちこそ元気なの？ 仕事はどうなの…食べていける…」

「ああ、大丈夫。仕事は順調。取引先も増えてきたよ」

加代はようやく落ち着き、やれやれ、と一息つく。

「それでね、お母さん、のかわさん、っていう名前の人、知ってる？」

意味がよく掴めない。とにかくそんな名前は初耳だと答える。漢字では外川と書いて、のかわ、と読む姓らしい。珍しい読み方だ…どこかで耳にしたような…何か頭の隅を過ぎった。

説明によると、外川はテレビ局のプロデューサーに紹介してもらった取引先の

経営者で、若い頃は遊戯機械のリースと販売をしていたそうさ。浩史の話の途中から加代はおぼろげな記憶が蘇ってきた。遊戯機械業者、外川…ずいぶん以前のことだが…。

その外川は二十年あまり前に商売替えをして、現在は広告代理店をやっているのだという。テレビコマーシャルなどの製作を手広くおこなない、今では息子にあたる社長がその業務をとり仕切っている。外川は八十に近い年齢なので今は会長の席にいます。

「この前、仕事の打ち合わせにその会社へ寄ったんだけど、社長の帰りが遅くなって、待たしてもらいながら会長と雑談したんだ……」

ここから浩史の話は長くなった。

外川は応接室のソファーに深々と腰掛け、丁寧に一礼した浩史に向かいの席を勧めた。

「待たせてすまんね。社長から聞いたんだが…君は四国の出身だそうじゃねえ」

「はい、そうです」

「僕はね、今は、仕事のほうは任しっきりにしているが、昔はね、四国にまで、工場を持っておったこともあるんですよ。いやまあ、正確に言うと、下請けの専属工場じゃったがね…。東京本社、四国工場、と並べて刷った名刺を持ってね、全国を股にかけて商売したもんですよ…」

「……」

浩史は両手を膝におき緊張した面持ちだ。

「工場は、香川県の志度というところじゃったんですが…。平賀源内の生まれた町とかで、ああ、君のほう詳しいんかな」

“志度なら、母の生まれた町だ。今も祖父母が住んでいる…” 浩史は思わず大き

な瞬きをした。それを見てとった外川は饒舌になった。

三十歳のとき会社勤めに見切りをつけた外川は娯楽機械関係の仕事にかかった。

当時は今のように多様なレジャー施設はなかった時代で、ドライブインレストランや喫茶店、それから観光地の旅館などが得意先だった。

客が硬貨を投入して遊ぶ機械はフリッパーゲームなどあるにはあったが、すべて輸入もので値段が高くそのうえ品薄で、外川の手におえるしろものではなかった。

無理を知りつつ着手したものの、投下資本の割には機械のあげるリース売り上げは少なかった。

小型でもいいが機械の値段が安くて、客うけのする機種がないものかと外川は考えた。ふと、自分でそれを開発してみようと思いたち町工場をあたってみたが、ポディーから内部の電気装置までを一貫して引き受ける所はなかなかみつからない。そのうち、志度で電機店を営んでいる永浜という、いっふう変わった技術屋のことを知人から聞き込んだ。

「この人は何でも手にかける、言わば発明家のような人物らしい。工夫するのが好きな人間なら、あたってみても損はないだろう」

その知人もまた聞きらしい。耳寄りな話だがあまりに遠方なので外川はちよつと二の足を踏んだ。だがやはり思い切れない。だめでもともと、と大した期待もせず伝手を辿って紹介してもらい、永浜を訪ねた。

会長の流暢な口調から突然、祖父、政一の名である永浜の名前が出てきたので浩史は思わず腰を浮かしかけた。どう相づちを打って良いか分からない。

外川の申し出に永浜はことのほか心を動かされたのか自分の技術を余すところ

なく打ち出して相談にのった。やがて二人は手を組んでオリジナルな機種を開発することになった。外川の洗練されたアイデアと永浜の技術が相まってヒット機種が次々と生まれ、外川は販売のため全国を飛び回り始めた。その機械は家族づれの客が簡単に操作して楽しめるもので、ゲームマニアの若者向けアメリカ製のものは一線を画していた。

四、五年は順調に売り上げを伸ばした。しかしそのうち外資企業が日本に進出してきて日本人向け機種の生産が盛んになり、業界はまたたく間に予想外の発展を遂げた。やがてテレビゲームが家庭にも浸透、大企業は矢つぎばやに流行を生み出していった。

営業には自信のあった外川だが、大きな資本の大手には太刀打ちできなかった。販路を押さえられ苦境に追い込まれ、ついにはここまでと見切りをつけ、永浜のものとを去った。外川の会社は倒産したが、後に彼は成人した息子と共に再起し、今日に至った。

「いい経験じゃったよ。あのころ一時期は笑いが止まらんほど儲かったな。あの技術屋さんとは、んん、兄弟みたいにつき合うたもんだよ。本当にあの人はよくしてくれたからなあ…だから、今でも四国が好きなんですよ…」

外川は思い出に浸るかのように目を細め、窓際に置かれているひと抱えもある鉢植えのポトスに視線を移す。この老人からは、かつてのような実業家らしい変わり身の早さはもう、うかがえない。

外川の話している間、浩史はコーヒークップを何度か皿に戻し、またとり上げて少しずつ口に運んだ。祖父の仕事ぶりを話の中で追っていく。母親は祖父のことを

ほとんど話してくれなかった。ここで偶然にも初めて政一の人となりを知らされた。浩史は外川と対等に渡り合った働き盛りの政一に思いを馳せて無性に嬉しくなる。空になってしまったカップを皿に置き顔をあげた。外川と目が合った。

「その若さでフリーになったんですから…君はこれからですよ」

外川は励ましの言葉を添えた。

「あのう…実は…」

浩史は思いきって声を出した。

「さきほどの、技術屋というのは、僕の祖父のようなんです。母方の祖父です。永浜

政一といいます」

浩史は自分の声がうわずっているのを感じながら身元を明かした。

「えつつ…政一、ああ、そうですね。そう、そう、永浜政一さん…」

外川はその名を噛みしめるように繰り返したが、まだ耳を疑っているのだろうか、身をのり出してまじまじと浩史を見つめる目頭が潤んできたように見える。孫と名乗る青年の中に永浜の面差しを捜しているのだろうか。

「君の苗字が永浜だったら、僕のほうが先に気がついたかも知れんな…母方か…そうか…」

外川は興奮を鎮めようとしているようだ。一瞬、黙り込み、続いて大きく息を吐いた。

(以上12月19日放送分)